

第71回日本小児保健協会学術集会 教育講演6

特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進
～三重大学教育学部附属小学校の実践～

松浦 直己 (三重大学教育学部)

1. ギフテッド児やギフテッド教育への関心の高まり

ギフテッドに関する明確な定義は存在しないが、参考になるのは、米国教育省の1993年に提示した定義であろう。それによると、「ギフテッドとは、知的、創造的、芸術的、リーダーシップ、または学術分野において顕著な能力を示す児童であり、その潜在能力を最大限に引き出すには特別な教育プログラムが必要な者」(Major Turning Points in Gifted Education in the 20th Century | Renzulli Center for Creativity, Gifted Education, and Talent Development)であるとされている。日本では、令和4年に有識者会議によって文部科学省に「審議のまとめ～多様性を認め合う個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の一環として～」として、取りまとめられた。そこでは、敢えて「ギフテッド」という用語を使用せず、「特定分野で特異な才能をもつ」と表現された。しかしながらごく一般的なイメージとしては、知的能力が突出している(例えばIQが130以上)とか、数学や物理、プログラミングなどに卓越した能力を有する子どもたちのことを、「ギフテッド児」と捉えている方が多いであろう。混乱を避けるために、そのような子どもたちを、本稿では「ギフテッド」と表記させていただく。

これまでに筆者はいくつかの学会で「ギフテッド児」や「ギフテッド教育」について話題提供したことがあったが、常にたくさんの聴衆者で、いわゆるギフテッドに関する社会的な関心の高まりを感じた。本邦では、特別支援教育に関しては膨大な知見が蓄積しているにもかかわらず、「ギフテッド児への支援」や「ギフテッ

ド教育の在り方」については、体系的な蓄積がほとんど存在しないといってよかろう。少なくとも数十年以上の長い歴史を有する欧米とは格段のギャップが存在する。今後本邦でもギフテッド児に対するアセスメントや具体的な支援の取り組みによって、格差を埋めていき、特徴あるギフテッド教育の発展につながっていくことであろう。

2. 総合的な学習を活用した実践

筆者は約10年前に、WISC-IVの作成に関わった際、三重大学附属中学校において被験者を募集し、15名以上検査を実施した経験があった。検査作成中だったので、正確なIQの数値は得られなかったものの、これまでの経験から恐らく130以上あるのではないかと推察される生徒がかなり存在したのである。「もしかしたら附属学校には知的に高い子どもが高い割合で存在しているのではないか」と考えた。

その後附属小学校の校長を拝命し、教育活動を具に観察する中で、全国学力検査の結果等も踏まえて、改めてそのインスピレーションに確信を深めていき、附属ならではのギフテッド教育ができないかと考えていた。

令和5年度に、文部科学省による「特定分野に特異な才能のある児童生徒」支援事業1年目がスタートし、三重大学教育学部附属小学校としてアプライし採択された。以下簡単に紹介するが、非常にユニークな取り組みの特徴として以下の5点が挙げられる。

●総合的な学習の時間を活用し、6年生の全児童を対象とする

●医学・生理学の分野に特化し, 全6講座を提供する

●事前学習や事後学習はあくまで自主性を重んじる

●学びの到達点の上限を撤廃する。興味関心があれば, どこまでも深く学んでよい

●同様に下限も設定しない。興味がなければ, 講義を聴くだけでもよい

講義の講師は三重大学医学部および附属病院の専門家に依頼し, 45分の講義, その後45分の質疑を実施した(小学校では2コマ分にあたる)。内容の難易度はほぼ大学生レベルであった。医学・生理学に特化した理由は, 子どもたちのアンケートで将来医療関係に進みたいという希望者が多かったからである。興味関心に沿って, 毎回熱心に聴講し, 活発な質疑応答が展開された。むしろ講師の先生の満足度が高いと思われる場面も多かった。

6回の講義を受講後, 2月には個人もしくはチームで関心のあるテーマを選び, 講師の先生方を招いて, 学習発表会を開催した。学会発表と同様に, 口頭発表とポスター発表のどちらかにエントリーし, より深く, より広く学んだことを科学的に検証し, 子どもたち同士で報告し合った。

子どもによっては, 遺伝子の構造や染色体の仕組みについての高度な内容においても, かなり深く研究し, 質問したり, 疑問をぶついたりする場面が頻繁にあった。ギフテッドといわれる人たちは好奇心が強く, 貪欲に学ぶ傾向があるといわれている。彼らにとって, 「学びの到達点の上限を撤廃する」という経験はきわめて新鮮であり, 効果があったのではないかと思われる

た。

3. 非認知スキルの重要性

我々が文部科学省に本プロジェクトを申請するにあたっては, 特定の子どもたちの認知スキルを伸ばすというよりも, 「モチベーション」「好奇心」「他者へのリスペクト」「粘り強さ」などの「非認知スキル」の育成に重点を置くことを心がけた。数学や科学などで高い認知能力を有していたとしても, 将来それを活かすのは, 先ほど挙げた非認知スキルである。

国立大学の附属学校は, 「最先端の課題解決に関して実験的に取り組む」ことや「地域のモデル校となること」を使命としており, 本プロジェクトはまさに時宜を得た教育活動であった。そして普段から非認知スキルの育成を最重要課題にしていたからこそ, このような先進的な教育活動が展開できたのではないかと考えている。

4. よくある誤解や神話について

卓越した才能や知的能力を有している一方で, 社会性や情緒面での課題を併せ持つケースもある(2重に特別な存在という意味で two exceptional : 2E と表現されることが多い)。確かにそういう子どもも存在するが, 卓越した才能を持っている子どもが必ずしも社会性や感情調節の課題をもっているわけではないことを強調しておきたい。高い知能を持っているから, 社会性や感情爆発の問題は仕方がないという姿勢は, そのような子どもたちにとってのプラスの教育にはならないであろう。